日本と中国における現代琵琶音楽創作の比較研究

魯戴維（東京音楽大学大学院）

本発表は、筆者の博士論文に基づき、1950年代以降の日本と中国における現代琵琶音楽創作を比較し、西洋の芸術音楽の文脈において、両国の作曲家が琵琶という伝統楽器をどのように扱ってきたのかを考察するものである。日本の薩摩琵琶・筑前琵琶と中国の現代琵琶は、いずれも東アジアの伝統楽器としての歴史を持ちながら、20世紀以降、西洋の芸術音楽の創作環境の中で新たに位置づけられてきた。しかし、その用法や作曲上の発想には大きな差異が見られる。本研究は、この差異を通じて、日中両国における「伝統楽器」へのアプローチの相違を明らかにすることを目的とする。

中国では、20世紀以降の楽器改良、教育制度、伝統音楽に関する政策などを背景に、琵琶が西洋音楽理論や合奏体系と結びつき、旋律・和声・技巧の面で体系化されてきた。そのため、現代の芸術音楽作品においても、より広い音域やシステム化された奏法を前提とし、西洋音楽の構造やアンサンブルの中に琵琶を組み込む傾向が強い。一方、日本の琵琶は、語り物との関係を残しつつ、戦後の芸術音楽創作において、伝統的な奏法、音の揺れ、声との関係などを含む音色や時間構造を重視する楽器として扱われてきた。本研究では、作曲者の視点から、記譜法、旋律、和音、奏法、音色などの観点に基づき、日中の現代琵琶音楽作品における琵琶の用法を比較する。

以上の比較から、日中の現代琵琶音楽はいずれも伝統との関係を基盤としながらも、中国では伝統楽器を西洋的・体系的な音楽制度の中で再構築する方向が強く、日本では伝統楽器の音響的特性を芸術音楽の表現手段として読み替える方向が顕著であることが明らかとなった。本研究は、この差異を単なる様式上の違いではなく、両国における伝統音楽観、楽器観、創作に関する制度の相違として捉える。その上で、日中琵琶の相互参照の可能性を示し、伝統の記号性に拘束されない新たな琵琶音楽創作の方向性を提示する。